
君が僕を待つなら～オーストリア一家の場合～

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が僕を待つなら〜オーストリア一家の場合〜

【Nコード】

N6340P

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

ジングルベールな当夜。

オーストリア邸にあつまったハンガリー、イタリア、ドイツ、プロイセン。それぞれの思惑と重なる思いが交差した先にあるのは、なに…？

変わるようでも変わらない関係がひたすらもどかしい、
聖夜限定ストーリーです！！！！

(前書き)

こんばんは!!

君待のメリカ編から大分時間が空いてしまいましたね：

今回は”小説家になろう”の作家様の八鹿様の連載完結をお祝いたしまして、リクのオーストリアさんのお話になります

といっても登場人物（オーストリア、ハンガリー、イタリア、プロイセン、ドイツ）の五人全員がまた好き勝手しゃべるのでリクにちゃんと沿えているのか謎です。

ていうか多分きつと沿えてない気がする（笑）

X'mas用のお話ですので
リア充、非リア、どちら様とも楽しく読んで頂けるよう祈っています。
メリクリっ!!!!

それでは召し上がれ♪

↓

+++++

もしもし

ああ、ドイツですか？

今どこかの路地裏です。

迎えにきなさい

+++++

まったく。

俺は大股で冬のくすんだ路地裏を闊歩していた

朝からきつちりと固められていたはずのオールバックは電話を置いた直後に慌ただしく出かける用意をしているうちに乱れ、僅かに綻んでしまっている

ピルルル、ピルルル。

「ドイツだ」

「私です。今、教会の塔が見える場所に来ました。見覚えがないですけど、私は家に近づいていますよね」

俺は眉間に皺をよせる

「頼むからもう動かないでくれ。そっちは真逆の方向だ」

「そうですか。では教会でミサをやっている様なのでついで見えていますから、着いたらまた連絡なさい」

ツー。ツーツー

切りやがった…

盛大にため息をつく

そして踵を返して頭のなかにあいつが行ったらしき教会の地図を頭に思い浮かべる

この辺にある教会といたら一つしか思い当たらないので俺は迷うことなく最短ルートを割り出して歩きだす

一人で買い物など行かせるんじゃないかった

まったく。

何回目かも分からぬため息に、俺は呼吸の度にため息をついているのではないかと、自嘲気味に思ったのだった

+++++

「ああ、ご苦労様です」

「ローデリヒ：」

教会に着くと俺を呼び付けた張本人は入口近くのベンチでご年配の婦人と並んで腰掛けていた

「あら、ローデ卿のお付きの方かしら」

婦人は優雅に笑いながら言う

俺は困って、ローデリヒをみると彼は少し眉根をよせてみせた

心の中でため息をつく

「：いかにも。主人をお迎えにあがったところです」

俺は腰をおると少しオーバーがかった仕草で婦人にひざまずくと、日の焼けていない白い手に恭しく口づける

若い娘なら顔を真っ赤にして興奮の悲鳴をあげるであろうそんな仕草に婦人は少し口元を緩めるに留まった

「卿、帰りましょう」

「はいはい。分かっています」

オーストリアはしなやかな動作で立ち上がる

「ああ、ローデ卿。これをお返ししないといけません」

婦人は膝掛けを取り払って同様に立ち上がる

「いいえ。ご迷惑でなければ受け取ってください。日が落ちるにはまだ時間がありますが、随分と冷えますので」

婦人はすました動作でスカートの裾を治し、俯いたがしばらくしてから堪えきれなくなったのか少女のように笑った

「? いかがなされましたか」

ローデリヒが怪訝そうに聞くと婦人は咳ばらいをしたあとに「こんな娘の頃のような待遇は久しぶりですの」と言った

俺には嫌そうではなく、むしろ嬉しそうに見えた

「失礼、気を悪くさせましたか? お美しい貴女のような女性にはこのような対応しか思いうかびませんでしたので…」

「ご、ご、ご機嫌よう!!!」

口をぱくぱくさせながら頬を赤くそめた婦人はぱつ、と踵を返して立ち去ったのだった

…やれやれ。

+++++

「つくしゅん」

鼻を赤くしたローデリヒがくしゃみをした

俺の迷子になったときに何を目印にすれば帰れるかの教示をローデリヒはいつものように平然と聞き流していた

こいつは人の言うことをあまり聞かないのは心得ているが「それくらい分かってます」の非難の聲が今日はまだ聞こえていないのが気にかかった

「つくしゅ」

「…ローデリヒ？大丈夫か」

足をとめていつのまにか俺の2歩後ろを歩いていたローデリヒを振り返る

ローデリヒはぶるぶると震えていた

俺は呆れ返る

「よく見たらお前、なんて薄着をしてるんだ」

アンダー、カッターシャツ、その上に薄手のコート。

まだ真冬とはいかないものの、二ヶ月前なら調度いいような服装ではいくらなんでもあんまりである

「なぜもつと着ないんだ。体を冷やすと風邪にかかるぞ」

5枚着込んだ俺は歩き回って暑くなっている程なのに

コートを肩に掛けようとする結構です、と半眼で睨まれた

「着膨れなど論外です。上品じゃありません」

…俺は気を遣ったつもりだったのだが。

少しムツとするが、こいつの頑固さはもう嫌になるぐらい知っているから無理矢理着させるのは諦めた

第一、唇を青くして震える貴族は上品なのだろうか

俺には理解できない。

「そもそも、お前手袋とマフラーはどうしたんだ。出かける前にはしてたじゃないか」

確か買い卸したばかりだと言っていた指の長いローデリヒに良く似

合う黒い革の手袋と、白い羊毛を織り込んだ幾何学模様のマフラー。どちらも品の良いローデリヒのオーダーメイドでかなりの値がはっているはずだ

「なくしました」

ローデリヒはなんてことないようにいった

ぼんやりとした視線の先には着古し尽くした服に身を包んだ親子の後ろ姿があった

「なくしましたってお前……」

物を簡単になくすなど叱ろうと息を吸ったとき、ふと娘の方が振り返った

パンの入ったカゴを抱えた少女はぽつと輝くように笑顔を浮かべてこっちに手を振った「さっきはありがとうーございましたあ!!!!!!」

俺はあれは知り合いだったかな、と記憶をめくり返してみるが思い当たらない

と、ローデリヒが控えめに手をふりかえした

母親は深く何度も頭を下げると娘と手をつないで裏路地に消えていった

「ローデリヒ、知り合いか」

「いえ。ちょっと」

いきましよう、と言ってすたすたと歩きだす

数歩で追いついて横に並ぶと

ローデリヒの顔は先程より穏やかであった

俺は一人了解する

あいつのことだ

大方親子が寒さで震える所にでも偶然立ち会ってしまったて「これでパンを買いなさい」とか言って手袋をあげてしまった、という所だろう

そうくると、もしかしたらさつき婦人に渡した膝掛けだと思っていたものはマフラーかも知れない

俺は素直じゃない我が儘貴族のそんな所を気に入っている

「ローデ」

振り返りざま、緩く孤を描いて落ちていったそれを掴む

「？」

「缶珈琲。なかなか美味いぞ？」

一口飲むと口の中に飲みなれた苦さが舌に広がった

「工場で大量生産された珈琲を買う気が知れません」

不機嫌そうに言う

俺は笑う。

ローデリヒがあまりにも予想通りの反応をするから。

「ポケットにでも入れておけ。少しの間くらいは暖かいだろう」

ローデリヒは虚をつかれたような顔をしたあとに「なるほど」と言
って素直にポケットに缶珈琲をしまう

もう家も近い。

あと15分はかからないだろうから、それくらいなら温いままでい
てくれるだろう

再び歩きだす

「飲まないなら家についたら俺にくれ。」

ぬるくなっているだろうが温め直せばいいだろう。

俺はローデリヒと違って高価な物でなくても抵抗がないし、捨てるのはもったいない。

「…。」

「ん？何か言ったか」

ぼそぼそと呟く声がして横をみる

ポケットから再び出した缶珈琲を頬に当てながら「別に飲まないと言っている訳ではないんですよ」とぼつりと言った

…。

俺は家につく間中、にやけるのを止めるのに無駄な労力を割くはめになったのだった

+++++

「ただいま帰りましたよ」

「あ、お帰りなさい。オーストリアさん」

「お帰りなさい。ドイツう、ハグハグー」

「わかったわかった。後でな」

昼間と夕方の丁度境目の時間にドイツさんとオーストリアさんは並

んで帰ってきた

揃いに鼻と頬が寒さで赤らんでいるのが妙に可愛らしい

イタちゃんは早速ドイツさんに抱き着いている

私はふっと意地悪をしたくなる

「イタちゃんってば、ドイツさんがいない間5分に一回は『ドイツまだかなあ』って言ってたのよね」

イタちゃんはくるんとした巻き毛をぴくりと動かす

「ヴェー!! ハンガリーさん言っちゃダメって言ったのにー」

おろおろと視線をドイツさんと私の間にさまよわせる

「む、そうか」

ドイツさんは口を一文字に結んでそっけなく頷いてイタちゃんの頭を撫でた

(嬉しいのを押し隠しているのは見え見えである)

「ハンガリー、これ。しまっておいてください」

名前を呼ばれて視線をお花が乱れ咲く二人からオーストリアさんに移す

オーストリアさんは持っていた袋を私に渡す

「わぁ、随分と高そうなのを買って来ましたねえ」

袋を覗き込むと赤ワインが二本、白ワインが一本。それに：

「あれ？珍しい。ビールも買ってきたんですか」

「…買った覚えはありませんが」

「！！っごほ、ごほんっ」

ドイツさんが急にむせる

「ドイツ…」

「ドイツう死んじょうの？ねえ、やだやだぁー！！」

涙を飛び散らせて泣きまくるイタちゃんと対照的にオーストリアさんは露骨なため息をつく

「あー、イタリア。俺は大丈夫だ。…ローデリヒ、それは、その…。い、家用だ。」

腰に縋り付くイタちゃんを引っぺがしつつドイツさんは言う

オーストリアさんは暫し黙っていたがやれやれ、といった表情を浮かべて笑った

「ハンガリー、一緒に冷やしておいてください。」

「!! ローデ…、いいのか」

「今日は特別ですよ」

「じゃあ地下蔵に入れてきますね」

私は曇りガラスの嵌まったドアを開けて廊下に出ると足取り軽く地下蔵への階段を下る

オーストリアさんは滅多にビールを飲まない

それに余り浮かれ騒ぐほどに酔ってどんちゃんするのも好まないの
でいつもお酒は嗜む程度でやめてしまう

だから、さっきのやり取りは私に大きな驚きを与えた

…それと、大きな温かさも。

「えーと、スイッチ。スイッチはどこかなー。」

小さく独り言を言いながら真っ暗な地下蔵の壁をまさぐって電気の
スイッチを探す

がた

「!」

私は丁度”ON”スイッチを押しかけた手を離し、近くのワインセラの棚の影に身を寄せる

(音が…)

がたがた、

がちゅん

(窓からだわ)

私はそつと袋を置くと更に小さく身を潜める

ちつ、と誰かの舌打ちと何事かをぶつぶつと呟く音がする

(どうしよう。一回、オーストリアさん達の所に…)

ザッ

誰かは窓から床に降り立ったようだ

そういえば倉庫の窓は随分と前から鍵が壊れていたんだっけ

プロイセンに直すように何度も頼んでいたのに…あいつ。

(つて、そんな場合じゃなくて)

近づいてくる誰か

私は助けを呼ぶ案は捨てることにした。元々腕は立つのでそこいらの泥棒ごときには負けない自信がある

慣れてきた視界の隅にワインの瓶が映る。

(もったいないけど)

息を吞んで、タイミングを見計らう

3、2、1…

今!!

「うりゃああ」「え、ちよっ」

大きく振りかぶった腕だったが敵は俊敏にそれをかわす

私は続けざまに仕掛けていくが、空ぶるばかりで一向に当たる気配がない

「「っはあ、はあ」」

二人は荒く息をつく

酸素不足で話すことどころか声をだすことすら敵わない

敵も息があがっているけれど、私の攻撃を掠りもしないままに軽やかに避ける

この泥棒、ただもんじゃないわ

(でも)

遠い遠い昔

戦うことに強い興奮と快感を感じていたあの頃の血がふつつと再沸する

泥棒が後ろに下がろうとして、背中にあたった固い感触に息を飲む音がする

(楽しいなあ)

ああ、もう貴方には後がないわ

顔が獰猛ににやける

こんな姿、オーストリアさんにはとても見せられないわね

（私の勝ち。）

「つやめろ！！ハンガリいいい」

「はっ？」

がっしゃああん

+++++

「だからさっきから謝ってるじゃない、ばか男っ！！」

「んだと、獰猛女っ！！」

「ナルシスト！！」

「猫かぶり！！」

「友達いなくせに！！」

「なっ…！！それは言うんじゃねーよ」

途端に泣き目になったオレ様をみてハンガリーはこれみよがしにガツポーズする

…可愛くねーの。

窓ガラスに映るオレ様の手当ての終わった頬はガーゼとテーピングが貼ってある

「ちょっと大袈裟じゃないか」

ハンガリーが渾身の力で振り下ろした瓶は制止の声も間に合わずに木っ端みじんに割れた

オレ様の超すばらしい反射神経で顔面直撃は避けられたものの破片のいくつかはオレ様の超カッコイイ顔に傷をつけた

「足りないよりいいじゃんっ」

ハンガリーは拗ねたように顔を背ける

見慣れているはずの表情なのに視線はしっかりとその横顔に縫い付けられていた

そんな自分に腹がたった

「…あーあー。傷が痛むなあー。これは坊ちゃんにしーっかりとお伝えしないとだな」

「うつ。うつう」

ぱっ、と振り向いた顔に浮かぶのは憤怒と諦めの混ざりあい。

「うつ…。あ！！そうよ、あんたが地下蔵の窓の鍵直してれば。あ

んな所から入って来なかったら私…だっ…て。」

小さくなっていく声

「支離滅裂」

「…わかってるわ」

がくりと肩を落とす

てか、大体なんでオレ様がわざわざ地下蔵から入ってきたのか知ってるかこの野郎！！！！

玄関の鍵も庭に面した鍵も閉まってたからだよこのやろー。

オレ様忘れられてた？

…別に寂しくないぜー

ハンガリーはテーピングとハサミをゆっくり床に置くと、居直ってオレ様を初めて直視した

外から湿っぽい風が吹いた

「ごめん」

ぽっかりと浮かぶ言葉

窓からの明かりだけが倉庫を照らす

逆光の位置に座ったハンガリーの輪郭は金色に輝いていて、思わず
みとれてしまう

オレ様とハンガリーの距離、
約1メートル。

ハンガリーがオーストリアの嫁になったその時から埋まることのない
近いのに、遠い距離。

ああくそっ!!
勘弁してくれ!!

「いっつ」

「!! 傷いたむ? 大丈夫…」

ぐいっ

ふわりと
感じる体温の温かさの数瞬あとにハンガリーの長い髪がオレ様の頬
をなでた

「っ！！！」

腹が圧迫される

ハンガリーが腕でオレ様から体を剥がそうともがいているのだ

「ちょっと！！やめ」

「そんなでかい声してっと坊ちゃんきちまうぞ？」

一瞬にして黙るハンガリーをもう一度強く抱きしめる

「傷、」

「え？」

「通りで絡まれたことにしてやるから、さ。
もう少しだけ、このまま…」

オレ様は自嘲する

できの悪い、
頭の悪そうな言い訳に。

ハンガリーが腕の中で身じろぎした

「約束して」

「! ! ! : ああ」

オレ様は死ぬほどびっくりしてなんともマヌケな返事をしてしまった
まさか了承が得られるとは。

ワインセラーの影がハンガリーの俯いた顔を隠している

見えるのは白いうなじ、細い肩、小さい頭。

よく小さい頃は男だと間違えたもんだ。全然女じゃんか

震える自分の手を叱責してもう少しだけ自分の胸に寄せる

:

嫌だと言われていたら「冗談にきまってんだろ」とでもいって笑い
飛ばして、それで。

それでおしまいだったはずだ

…今なら伝わるだろうか。

「ハンガリー」

返事はない

「オレ様、お前を好きだぜ」

返事はない

眠っていてくれたなら、
そのほうがいいと思った

「愛してる」

なにかが外れた

何百年の想いが

友情が、恋情が、熱情が。

苛立ちが、焦れったださが、苦しさが、眩しさが。

津波の様に押し寄せて

オレ様は沖に流されて、もう後には戻れなくなる

愛してる、愛してる、愛してる

ハンガリーの髪に額を埋めて
一分の隙間なく抱きしめて

囁く言葉は愛じゃなく。

「行かないでくれ」

細かく震えていた肩がぴくりと跳ね上がる

顔を見れるのかと期待したのに

「もういいでしょう？」

腕のなかの声はあまりにも冷えきっていた

一瞬緩んだ腕の力を見逃すはずもなくハンガリーはオレ様を突き飛ばす

「つてえ」

「もう」

目をあげるとハンガリーは再び光を背に立っていた

「もう遅いのよ」

音も立てずに頬を伝う涙が
顎から落ちる刹那、輝いた

「遅すぎるのよ」

ハンガリーは齒を食いしばったまま歩き去っていく

「待てよっ!!」

遠くなる足音。閉まるドア

地下蔵には沈黙が満ちていた

「ははは…馬鹿だ」

オレ様は馬鹿だ

あいつが嫁ぐ朝、決めたのに。

あいつが人のものになるなら、せめてオレ様はあいつを笑わせられ
る男になろう

愚痴を聞いて

喧嘩して

誰よりも、夫よりも近くにいられる親友になろうって

この気持ちは
とっくに切り捨てたはずなのに

「痛てえ」

無理矢理笑って、開いてしまったのだろうか

急に痛みだした頬の傷

「…愛してる」

ガーゼを剥がし、晒された傷口に爪を立てて引き裂く

「っああ、いってーな」

窓を閉めようとのろのろと立ち上がる

よく磨かれた鏡に映るのは

ひどい有様なオレ様。

なあ、ハンガリー

この傷もお前がつけたものなら一生消えなくなつて構わないと思う
ほどにはな、

この気持ちは本気なんだぜ？

+++++

眠れない夜にはホットチョコレートをつくること。

（ただし、いつもより熱々につくってゆっくりゆっくり時間をかけて飲まなきゃだめなんだ）

おれの当たり前になっていた、オーストリアさんから教わったよく眠れるための儀式

熱々のマグを持って寝室に戻ろうとすると、客室の一つにまだ電気がついたままなのがみえた

あれはプロイセンの部屋

確か部屋をでる前に壁掛けのアンティーク時計は1時24分をさしていたはず

（何してんだろ？）

気づけばノックしていた

「失礼しまあす〜プロイセン」

「おっあ、あうあああ!!」

新しい生き物の様な声をだしてプロイセンは机に伏せた

「…プロイセン？」

「い、いちゃん？どうしたんだよこんな時間に」

なんだかすごく不自然。

声裏返ってるし。

おれは俄然興味が沸いた

「眠れなくなっちゃってホットチョコレート作ってたんだよ。プロイセンこそ何してるの」

「オレ様…？オレ様は、な」

かああああってプロイセンの顔がみるみる赤くなる

そして伏せていた体をゆっくりと持ち上げる

大量の紙が机上を侵略していた

「手紙？」

「ああ。」

その一つに手を伸ばすとプロイセンに目にも留まらぬ速さで奪い取られた

「だ、だめだ！！」

「なんだよーちえ。」

プロイセンは便箋をかき集めるとぐちゃぐちゃと丸めてごみ箱に押

し込んだ

手元には一枚の便箋だけが残る

それを丁寧に折って、飾り気のない封筒にしまい込んだ

「なあイタリアちゃん。今時手紙なんて古臭いかな」

プロイセンが頭をかきながら唐突に言った

「おれはそうは思わないよ」

二度と声が聞こえることのない初恋の人からせめて手紙が届いたらいいのにな、なんて

しょっちゅう考えることだし。

プロイセンはおれの答えが意外だったのか、何度か瞬きしてから「ありがとう」と何故かほっとしたように言ったんだ

「イタリアちゃん、ちょっとお使い頼めるか」

「うん。いいよ。明日の朝1番にでもポストに入れて」

「ポストじゃなくてな」

プロイセンは自嘲するように小さく笑う

「ハンガリーに渡してくれ」

同じ建物内じゃない、とは言えなかった

手紙を見つめるプロイセンの目はぞつとするほどに赤かった

決意、とかそんな感じ。

「分かった」

「頼んだぜ」

疲労が溜まってる顔で

それでもプロイセンはにかつ、とかっこよく笑った

再び廊下に出て右手にホットチョコレート、左手に手紙を携えて歩きだす

「気になる」

手紙、なんて書いてあるんだろ

プロイセンがハンガリーさんのことっていうなら…

やっぱりラブレター、とか

「見たいくすぐく見たいよ」

でもここで誘惑に負けちゃだめだよね。頑張るよドイツ!!

「あ」

前髪がすき間風に揺れる

みると窓の一つが僅かに開いていた

「閉め忘れだね」

背伸びすればぎりぎり届く位置にある窓。よし

手紙を脇に挟んで背伸びして窓枠になんとか触れる

「わっ」

一陣の風がぶわっと吹いてきて思わず目をつむる

手紙はするりと抜け落ちて床に落ちてしまった

おれはとりあえず窓を閉め、もう一度拾おうと腰を屈めて…

「…」

便箋が封筒から飛び出して半開きになっている

…半開きに。

おれは周りを見渡した

「ごほん、こほこほ!! いやあ、風のせいで手紙見えちゃうよ。ほんとに風のせいで、ね。」

誰に言うでもなく言い訳を繰り返し、手紙を見る

目に入る、たった一行の言葉

「絶対お前を振り向かせてみせるからな」

「…これだけ？」

性格とは似つかずに、美しく整った筆跡の文字はいくら眺めても増えることはない

なんだかひょうしぬけだ

例えば「愛してる」とか「可愛い僕のベイビー」とか書いてあったら面白いのになあ

ハンガリーさんの眠る棟の渡り廊下を歩きながら思う

底冷えのする空気に当てられてホットチョコレートはもう大分温くなってしまった

それをすすりながら手紙をもう一度ながめて、やっぱりなんだかん

だいてプロイセンとドイツは兄弟だなあってちよつと笑ってしまったのだった

「ハンガリーさん起きてる？」

返事はなかった

無理もない。もう2時だ

明日機会をみて渡そう、そう思いドアから一步はなれたその時絹擦れの音がした

「イタちゃん？」

「うん」

がちやりと複雑な創りの古い錠が解ける音がしてドアがゆっくりと開いた

ただしそれは腕が入るかどうかの狭い隙間だったけど。

「どうしたの、こんな時間に」

「…あ、いや。あのぶ、プロイセンに手紙を渡すように言われて持ってきたんです」

隙間から漏れる砂の混じったような乾いた声にまず驚いた

姿は見えないけどプロイセンの名前を言った途端に空気がぐっと固くなるのは分かった

「プロイセンから…？」

ハンガリーさんの声は酷く困惑していた

二人になにがあったのだろう

いつものハンガリーさんなら”まーたどうせくだらないことなんでしょうね”と呆れながらも楽しそうに（本人はきつと無意識だろうけど）受け取るのに。

きい、とドアが少し開かれる

廊下の僅かな明かりに照らされたのはハンガリーさんの口元だけだった

「それ、捨てておいて？」

聞き間違いだと思った

「…え」

「おねがいよ、イタちゃん
…おねがい。」

そう繰り返す

泣いていてくれたならよかったのに。泣いてたらまだ気持ちに区切

りがつけられたのに。

なんで笑ってるの？

髪が、

どんな時でも綺麗だったハンガリーさんの長い髪が乱れていた

それがなんだか

すごくショックだった

「じゃあ…もう寝るわね」

言葉を挟む暇もなく扉は閉じられた

おれは途方に暮れた

(どうすればいいの？)

おれはおれの創りだした幻影に問い掛ける

” お前はどうしたいんだ”

良く通るあの子の声

最初は怒ってるように聞こえたのに、今では胸が押し潰されるような懐かしさを感じる

(おれは皆に幸せでいてほしい)

幻影は可笑しそうに笑う

”ならもうわかってるんだろ？
お前がすべきことはお前がしたいことだ。”

そういうと幻影は——長いマントに空のような青い目のおれの初恋の人は消えた

ありがとう

おれは覚悟を決めると
目の前の扉を再びノックしたのだった

「ハンガリーさん、待って」

強めにドアを叩いて耳を当てる

耳は良いほうだ

呼吸の音までも聞こえるというのはさすがに言い過ぎだけど少なくともすん、とハンガリーさんが小さく鼻を吸る音ぐらいなら拾えるくらいには。

聞こえているはずなのに彼女は一向に返事をする気配はない
でも…諦めない。

どろどろどろどろ

「やめなさい！！」

やがてドアの中から苛立ったような声が刺さった

「やめなさい！！」

おれも半ばやけっぱちになって叫び返した

「知らないくせに！！イタちゃんは何も知らないくせに！！もう放って置いてよ」

「うん、おれは知らないよ。知ったこっちゃないよ！！」

おれはなんだか言葉にできない圧迫感で吐き気がした

「でも、プロイセンがハンガリーさんのことずっと好きだったことは知ってるんだ。オーストリアさんと結婚する前に必死に笑う練習してたのを見てたんだ。悪口ばかりだけどプロイセンはオーストリアさんのことも大事に思ってた、だけど大好きなハンガリーさんがいなくなっちゃうのも辛くて…。本当に、本当に悩んでたんだ」

息も切れ切れにそこまで言い終わると荒く呼吸を整える

しん、と静まり返った廊下にハンガリーさんの嗚咽が聞こえてきた

…大好きなハンガリーさんを泣かしてしまった

自身の視界も僅かに歪む

ゆっくり深呼吸して強く目をつむる。ここはおれが泣いていいところじゃない。

これからなんとかして手紙を受け取ってもらわなきゃ、と回らない頭を動かしていると

ゆっくりと扉が開いた

「イタちゃん」

泣きつかれた顔でハンガリーさんはおれの頭を撫でた

「ごめんなさい。私、なんかもうだめだなぁ。どうしていいのかわかんない。」

だめだなぁ…だめだなぁ。

と何度も繰り返した

それは、とてもいたたまれない言葉だった

いつの間にかぬかしてしまった背を少し屈める

せめてハンガリーさんが背伸びしなくてもいいように

「手紙を」

感情の抜けた瞳を見据えて、意を決して話し掛ける

「読む義務があなたにはあると思います」

ハンガリーさんの目が大きく見開かれてそして揺らいだ

「…見せて」

「はい」

手紙を手渡す

おれはこの場を離れようと背を向けて歩きだす

（手紙を読むときに人にいられると読みづらいからね。おれにだつてそれくらいわかるよ）

「待つて」

肩を掴まれて振り返るとハンガリーさんが下を向いたまま「読み終わるまでいて頂戴」と言った

それを拒否する理由はなかった

「なによ、たったこれだけ？」

ハンガリーさんは呆れたように鼻から息をついた

「余計なこと考えちゃって損した。あああ!!あのばかのせい」
ムカつく、ムカつく!!とおれの首を掴んでぐらんぐらん揺するも
んだからおれは首がもげるんじゃないかと心配した

「ヴェー!!ハンガリーさん、痛いってばー」

「きゃ!?!イタちゃん!!ごめんね、しっかりして」

ふあ、死にかけた…見えちゃいけない樂園が見えちゃったよ

「よかったー。ハンガリーさんが元気になってくれて」

ハンガリーさんはキョトンとしてから照れたように笑った

「ご迷惑をおかけしました」

おれも吊られて笑う

安心からくる疲れが途端に襲い掛かり二人揃って大きくあくびをし
てしまい、また笑った

「ハンガリーさん、今日の夢はいかがでしたしょう?」

「ふふ、懐かしい」

ハンガリーさんはくすぐったそうに目を細める

おれがまだ小さかったところに、ハンガリーさんと二人で作った遊び

の一つ

寝る前にお互いがシェフになってその日に見たい夢を注文オーダーして見せてもらうというもの。

おれは甘いものの夢ばかりを注文オーダーしていたなあ

ハンガリーさんは目を伏せる

「そうねえ……さらわれる夢。私とその人の他にはだれもこれない秘密の場所に住むの」

「え？ それって――」

どっちのことですか？ の言葉は続けられなかった

唇にハンガリーさんの長く綺麗な指が触れたから

「内緒」

おやすみ、といってハンガリーさんは自身の部屋に戻ってしまった
おれはしばらくぼけっと開くことのないドアの前に立ち尽くしてしま
う

はっとして自室に向かうべく早足で歩きだす

ドキドキと鼓動が五月蠅い

頬も若干熱い

「まいっちゃうなあ」

濡れた睫毛、潤んだ瞳が意識しないままに次々に浮かぶ

おれはハンガリーさんの触れた唇に軽く歯を立てる

「っ！これ以上ややこしくしたくないんだけどっ！！」

頭を冷やそうと窓に近づく

真っ暗な空を写す窓は同時に鏡のようにおれの姿も写した

虚像の自分にそっと触れて、

小さくつぶやく

お客様をシェフがさらうなんてできないんだから、ね。

何故か明日が来なければいいとそう、強く思った

+++++

自室に乾いた音がする

皮張りの装丁はずっしりと重くて、それを置く膝は疲れてきた
だが長持ちで丈夫なことには変えられないのだ

また一つアルバムのページをめくる

自国の歴代の大統領や科学者、有名人の格式ばった写真ばかりのページが少しずつその形式を変えはじめる
スイスと一緒に草原を走り回っている写真

（思えば随分小さい頃からの付き合いですね。兄貴風を吹かせるのが好きな方でした。でもおぶされていると妙に安心できたものです）
イタリアが神聖ローマとハンガリーのバースデーケーキを作っている写真

（イタリアは器用な子でした。飾り付けも上手で…。神聖ローマは不器用で生クリームが上手く絞り出せなくてイタリアに手伝ってもらってましたね）

初めてドイツが食事に家にやってきたときの写真

（あの時はドイツがじゃがいもを食べるのを初めて見たのでした。ひどくみっともなく食べたののように感じて叱った覚えがあります）

プロイセンがソファでだらし無く寝転んでいる写真

（なにかお祝いごとがあった日でしたね。プロイセンが酔って間抜けにお腹をだしたまま眠ってしまつて：イタリアが面白かって撮つたやつです）

アルバムがめくらられる度に懐かしい記憶に満たされていく

ブックススタンドの強くない明かりが手元だけを照らす

長い間放置してきた離れの倉庫の一つを大掃除をしていたら出てきた大量の写真

自分は写真はそれほど好まず、撮ったとしても草木や歴史的建造物ぐらいであるからこれはハンガリーとイタリアが撮りためたものだろう

写真の中の笑顔はどれも驚くほどに眩しい

どうしても規律に厳しくなってしまう自分がカメラを持ったら皆はこれ程無邪気には笑わない気がする

だから、

これはとても貴重な物なのだ

「ん？」

一枚の写真を手に取る

今日のように皆で集まって食事をしたときの写真のようだ

自分、ドイツ、プロイセン、イタリアが写っている

ハンガリーがないということは撮る役に回っているのだろう

しかしその写真はプロイセンをフレームから外していた

ちょっとした違和感から他のページも注目しながら見てみる

イタリアが撮った写真にうつる皆は一点の曇りもなく笑っているのに
ハンガリーが撮る写真のプロイセンは笑い方がぎこちなかった

（はてさて、私の知らないところでまた喧嘩でもしていたのでしょうか）

この二人はかなりの頻度で喧嘩をしている

口が悪い、乱暴もの、男女（私にはこの悪口の意味がよくわからないのですが。）等々がプロイセンの言い分

デリカシーがない、友達がいらない、馬鹿、ナルシスト等々がハンガリーの言い分

はたから見れば「またですか」と呆れ返るほど同じような理由で喧嘩して同じようにお互いを罵りあって

いつの間にか、同じようにまた仲良くなっているのだ

いつでも笑っていて、物腰も話し方も柔らかく自分によく尽くしてくれる妻…ハンガリー。

その妻が人が変わったかのように下品な罵り言葉をプロイセンだけに投げつける

周りの人が一部の例外なく褒め囃す”完璧”で”理想的な”彼女

その彼女が肩書（はな）をかなぐり捨てて感情を自分勝手にぶつけ、泣きわめくのはプロイセンにだけ

「…」

嫌な部分にちらりと火がつく
認めたくない、嫉妬だなんて。

しかもプロイセンにだなんて。

自分はハンガリーのことを愛しているし、自慢できる、誇らしいただ一人の女性と知っている

でもハンガリーは？

ハンガリーにとって自分は「ただ一人」に成り得ているのか？

彼女は優しい

：イタリアにもそうだ。

彼女は礼儀正しい

…ドイツにもそうだ。

彼女は美しい声で歌う

…そんなことはフランスもスペインも知ってる

はて、彼女は…自分の前で泣いたことがあっただろうか？

思い出せない

「ああ、嫌な気分になってしまいました」

せっかく今日はX' m a s イヴだというのに

心に燦る疎ましい気分を追い払い、アルバムを閉じる

表紙を撫でながら自分は何を馬鹿な事を考えていたのだろうか、と
いまさらに苦笑いが込み上げてきた

数枚の偶然の産物である可能性の方が高い写真からよくもまああれ
だけ嫉妬できるものだ

ふと気づく

（私は私が自覚していた以上にハンガリーを愛しているのかも知れ
ませんね…）

冬のぼんやりと停滞した寒さは心を尖らすこともなく思考を宙に浮
かばせた

このアルバムを純粋な懐かしさを持って閲覧できる日はまだまだ遠
そうだ

なんとなしにそう思った

「何をしているのですか」

テラスに出ると柔らかな月光を背景にドイツが少しグラスを持ち上
げた

「寝ていたらイタリアに起こされたんだ。眠れないから少し付き合
え、と。いま兄さんを呼びに言っている」

「プロイセンもまだ起きているのですか」

「ああ、さっき通り掛かったらまだ電気がついていたそうだ」

大方飲み足りなくて眠れなかったんじゃないか、と苦笑するドイツにあれだけ飲んで起きながら…と呆れた様に言った

「すまんな」

「あなたが謝ることではありませんよ。プロイセンに言っているんですから」

もう一度くすくすと柄にない笑い声をあげたドイツは私に果実酒を注いだグラスを渡す

酔っているのか、その瞳はとろんとして優しげだ

「Merry X'masオーストリア」

「ああ、もう0時を過ぎていたのですね。

Merry X'mas、ドイツ」

かつん、と氷が溶ける様な小気味の良い音がする

「ローデリヒも寝れなかったのか？それとも煩くて起こしてしまったか？」

「いえ、起きていました」

何をしていたんだと不思議そうに聞かれたが、少し仕事が残っていた、といった

何故アルバムのことを言わなかったのかは自分でもわからなかった

「ドイツ」

「ん？」

「人を信じ続けることは難しいことですね」

ドイツはなんだいきなり、と眉を潜めた

「ふと思っただけです」

私は急に恥ずかしくなり酒に逃げた。酔った振りをすればいい

ドイツは目を伏せて頬杖をついたまま口だけをけだるげに開く

「人を信じられないのは
自分を信じられないからだ。」

私は答えが返ってきたことに驚きつつドイツをまじまじと見つめた

「どうしても信じれないなら俺がお前を信じる」

ドイツはすっとその眼を開けた

「お前を信じた俺を信じろ」

「…ドイ」「ドイツー！！プロイセン呼んできたよお」

あどけない声とともにイタリアと、引っ張られるようにしてプロイセンが入って来る

「なんだあ？坊ちゃんも夜更かしかよ」

「あなたと違って考えることが沢山ありますからね」

へーへーそりゃあご苦労様なことで、とプロイセンはケセセと特徴的な笑い声をあげた

かく言うプロイセンもなんだか疲れたような顔をしている

「…ヴェスト？顔が赤いけどもうそんなに飲んだのかよ」

「いや、そんなには…。というかタイミングっ、が！！（ぐによいによ）」

ドイツは何故か煽るようにグラスを一気飲みした

「あ、みて！！」

イタリアがうれしそうに指さすのは今年の初雪。

積もることのないだろうはかないソレは酷く美しくこの眼にうつった

「「「Merry X'mas」」」

誰からともなく重なるグラス

友情も、思慕も。

嫉妬も、初恋も。

全部全部飲み込んで
真っ白にしてしまおうか

今宵はそんな
投げやりな X'mas が

良く、似合う。

（後書き）

お粗末様でした！！

オーストリアやイタリアが子供の頃なぜカメラがあったかは内緒（
^ | ^ ; ） きゃー

なんだか若干シリアスめなお話にしてみました（最初はギャグ
路線で行こうとしたのに、おかしいなあ…）

フランス、スペイン、プロイセンは悪友でありますし、
ロシア、ウクライナ、ベラルーシは兄弟であります。

それに比べてこの五人ときたら付き合った期間があんまり長かった
もんだから

家族に成り切れず
友達に成り切れず

そして恋人にさえ成り切れず。

お互いが大切であることは百も承知であるのに
その関係が何であるかが彼ら自身にも掴めていない

そんな不安定さが大好きです！！

さて、私の小説を読んでくださっているかたがどのくらいいるのか
はわかりませんが私しばらくの間執筆活動を休止したいとおもいます
理由は一身上の理由です

再来年になるまではおそらく戻って来ないとおもいます

私の小説を待っていて下さる人がいるならばまた戻ってきます

では冬眠してまいります

さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6340p/>

君が僕を待つなら～オーストリア一家の場合～

2011年10月6日22時47分発行